

『君はグッドバイ』

◇ 登場人物

・ 医師

・ 夫

・ 妻

病院。病室。

妻、ベッドに横たわっている。

夫、ベッドの横に立ち、妻を見ている。

室内には音楽が流れている。

間

医師、病室に入ってくる。

夫 ああ（慌ててスマホから流れる音楽を止める）

医師 あ、いいですよ、そのまま流しても。

夫 ああ、いえ。

間

夫 好きだったんですよ、妻が。

医師 はい？

夫 この曲。

医師 ああ……

夫 もう聞けなくなっちゃうんですね。

間

医師 えっとですね――

妻（起き上がり）いやここ食いつけよ！って思いませんか？普通「この曲妻が好きだった曲なんですよー」みたいな感じで言われたら「いい曲ですネ」とか、なんて曲ですか？とか聞くでしょ？普通。なんか「ああ……」って。もっと興味持って！ っていうね。（横になる）

医師 えっとですね――

妻（起き上がり）っていうか「もう聞けなくなっちゃうんですね」みたいな感傷的なコメントをウチの夫が言ってるんだから、あこの人夫なんですネ実は、だから、そういう「もう聞けないんですね」みたいな寂しい感じで言ったらなんかそれっぽいこと返すのが医者の仕事だろ！ みたいなね。とかっても思ってたんですよ。まあ医者ってそういう気配りとかできない人がなるアレかもしれないですけど、

医師 えっとですね、まあ形式的にはあるんですけども、もし旦那様がよろしかったらですね、これから、あのー心拍を聴いて、で脈を測って、もし停止しているようでしたら、あの死亡宣告と、させていたただきたいと思います。大丈夫ですか？

夫 ああ、お願いします。

妻 あの、ちよつといいですか？ 曲流していいですか？ さっきの。好きだったんですよ、ほんとに。いいですか？ あ、じゃあ（♪）。あ、一応これライブ盤なんですよ。なんかライブ盤って、私だけですかね？ なん

かズルい感じしません？ 普通にスタジオとかで録るより全然楽しんでるじゃないですか絶対あれ。あ、でもちよつと思っただんですけど、なんでミュージシャンとかって、あ、このバンドもかはわかんないんですけど、なんで海外でレコーディングするんですかね？ あれ、私思うんですけど、って言ってもこれはあくまでも私の直感なんで、直感というか、推測なんで全然あれなんですけど、多分ですよ、全然意味ないと思うんですよ。別に日本でやっても海外でやっても、機材が一緒なら別に同じじゃないですか。じゃあ機材が違うのかっていうと、この時代にそれもどうなのってアレだし。だから多分ね、ただ単に、凄そう！とかカッコイイ！とかっていう、そういう部分の問題じゃないんですかね、あれって。って思うんですけど。思いませんか？

医師、妻の胸部に聴診器をあて、音を聴いている。
腕をとり、脈を測る。瞼を開き、瞳孔を見る。

妻 一応似た感じのアレで、ナントカちゃんを救おう！みたいな募金活動？みたいなやつなんかあるじゃないですか。ミウちゃんを救おうみたいな。あれとかも、手術とかってアメリカとか行ってからやるみたいな感じなのが多いじゃないですか。あれってアメリカとかでしかできないんですかね。技術的な問題なのか医療保険とかのあれなのかわかんないんですけど、私全然素人なんです。でもあれ、億とかいる？とかって思いませんか？募金。なんか3億とか、集まるみたいでお金。なんか、あんなにお金って必要なんですかね？ あれですかね、渡航費とかそういうのとか……あれって家族の分の宿泊費とかもあれに入っ

てるんですかね。どうなんだろう。っていうかあれ実は、普通に日本のどっかの病院とかで手術して、あとは残り全部貯金とかだったどうします？ 嫌じゃないですか？もしそんなだったら……。それと、そのミウちゃんを救おう！みたいなやつって、あれミウちゃんとかって言うていかにもか弱くて守ってあげたいみたいな感じだから3億とか集まりますけど、あれがもしナニナニ病の患者を救おうみたいなやつだったら、あんなにお金って集まりますかね？ どうなんだろう。集まるんだったら、絶対やったほうがいいですよ、みんな。みんなっていうか、なんかその団体みたいなので募金活動とか。やってんですかね？

医師、聴診器を耳から外し、丸めながらポケットに入れる。
腕時計を見ながら、

医師 一〇時一五分、ご臨終となります。

夫 ……お世話になりました。

夫、医師に向かって頭をさげる。

医師 いえ、……えつとじゃあ、私は一度戻って、ちよつとしたらすぐまた……この後のこととか、そういうったことを……

夫 はい。(頭を下げる)

医師、頭を下げ出て行く。

夫、椅子に座り、どこか一点をぼんやり見つめる。

女2 あのー、私こんなに喋って言うのもアレなんですけど、これって

私死んじゃったんですかね？ なんか状況的に、この感じっていうか、そういうの見たらなんか、もう死んじゃったって考えたほうが自然なんでしょうかね？ え、っていうか私思ったんですけど、え？こんな感じ？死ぬときって。なんかもつとこう、劇的な？劇的というかなんかこう、なんか、バシツと？バシツとっていうかバシツとっていうか、うわ死ぬー！みたいな。なんかそういうあれなのかな？とか思ってたんですけど。えー、そうなの？ えーなんか、聴いてないっていうか。思ってたのと違う……え？知ってました？こういう感じって死ぬの。やっぱあれですかね？ 私中卒なんで、そういう、なんていうか、ちゃんと教育とかあれじゃないと知らないんですかねこういうのって。

機械音になる。

夫、携帯電話を取り出し、耳に当て、部屋の隅に行き、妻に背を向ける。

夫 あ、もしもし、お疲れ様です、松嶋です。あ、はい、一応いま予定通り終わって、あのー正式に、妻の死亡の方がですね、認められています。

で、あとはあの書類だけ、死亡診断書をお医者さんの方から——あ、はい——

妻 私死ぬときは病死より事故死がいいなーとか思ってたんですよ。その方がなんか楽そうっていうか、

夫、電話を当ててるほうと反対側の耳を、指を突っ込んで押さえ、上体も少し前屈みになり、声量も少し大きくなる。

※次の①と②の台詞は同時

①妻 病死だとなんか苦しうだけど事故死なら一瞬で死ぬそうじゃないですか。だから俄然事故死派っていうか、あれだったんですけど。でもなんか、こんなあつげなくっていうか、スツと死ぬちゃうんだったら、病死でもいいなーというか。むしろ病死派に乗り換えよつかな。

②夫 確認なんですけど、今回お譲りするのが、肝臓と、腎臓と、でしたよね？——あ、全然——

夫(聞こえづらそうに)え？ え？ すいません、もう一回いいですか？ はい？ あ、ちよつとすいませんね。(妻を振り返り)ちよつと！

妻 え？

夫、人差し指を口の前で立てる。

妻、止まる。

夫、再度背を向け、指で耳を押さえる。

妻、夫の背中を見つめている。

夫 すみませんね。あのー、なんだっけ……あ、そうだ、今回は腎臓と肝臓を提供するってことで——あ、臓器に関してはまったく問題なく。

はい、健康ですね。——いや全然この人病気とかしたことはないの、全然高く売れると思います……あ、はい。あのちなみにですね、その金額というか、お医者さんのほうにもいろいろとお伝えしないといけないので——あはい——あはい——はい——はい——はい、合計でじやあ……——あ、はい。ありがとうございます。あのちなみに、こちらら現金で——

医師、病室内に入ってきて、医師が電話をしてるのに気付き、立ち止まる。書類をクリアファイルに入れて持っている。

夫 では……はい、また後で連絡します。はい、失礼します。

夫、振り返る。

医師 大丈夫でした？

夫 あ、すいません。はい、

医師 あ、あのこれ、死亡診断書です。

と、医師に渡す。

夫 あ、はい！ ありがとうございます。

医師 本来は精算のときなんですけど、まあ今回は、あの、特別なんで。

夫 助かります。ほんとありがとうございます、何から何まで。

医師 いえいえそんな。一応、医療もサービス業ですので、

夫 あのお支払いって、現金で大丈夫です？

医師 あ、はい。お願いします。

夫 たぶん今日すぐにはちよつとあれなんですけど、

医師 あ、全然それは、いつでもいいので

夫 今週中には持つてきますので。五〇〇万くらいなんですけど、

医師 あ、はい。ありがとうございます。

夫 いえ、こちらこそ。

医師 じゃあ……なにかあれば連絡ください。

夫 あ、はい。

医師 失礼します。

医師、夫に頭を下げドアに向かう。

妻と目が合い、一瞬止まる。小さく会釈をし、病室を出て行く。

間

妻(弱々しく話し出す)あの……私……死ぬときは俄然病死派っていうか……なんだろ……ちゃんと死にたいっていうか……あの、ちゃんと死ねるんですかね？ 私……

間

照明Ｃ・Ｏ

了